

# 福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第31号 2019年10月31日 発行

## 目次

*「私のレオン・ド・ロニー研究」(クリス・ベルアド) …… 2・3	*新収資料紹介 …… 10
*梨花女子大ワークショップ(西沢直子) …… 4・5・6・7	*主な動き …… 11
*中津プロジェクト報告(都倉武之) …… 8	*センター諸記録(2019年4月～2019年9月) …… 12
*大阪特別企画展(都倉武之) …… 9	

## 慶應義塾と日本ラグビーの発祥

慶應義塾の下田グラウンドに、日本ラグビー蹴球発祥記念碑が建立されている。その由来は1899年秋、慶應義塾の英語教師E・B・クラークが、同じケンブリッジ大学出身の田中銀之助を通訳兼コーチとして塾生にラグビーを教えたことが日本人によるラグビープレーの原点だからである。

ところで、今年9月5日、横浜の山下町公園に「ラグビー発祥地 横浜」記念碑というものが建立された。1866年横浜フットボールクラブ(現YC&AC)の設立を「日本のラグビー発祥」とするもので、しかもそれがアジア最古のラグビークラブなのだという。このことについての報道は一律に、1899年に慶應で始まったというのが「定説であったが」新研究で覆されたと、今までの「慶應ルーツ説」を誤りであったかのように紹介した。これは不本意である。

外国人居留地にラグビープレイヤーがいたことは百も承知である。なぜなら、慶應でできたラグビーチームは、日本中の学校で誰も対戦相手がいなかったの、当初はもっぱら外国人チームと対戦していたからだ。1901年、横浜のYC&ACとの最初の対戦は5対35の大敗であったが、徐々に力を付け、1908年に12対0で初勝利を味わっている。これ以外にも神戸のKR&ACが対戦相手であった。当然、外国人が居留地でラグビーをしていることを知っていたわけだ。



1901年YC&ACとの初試合記念写真



下田グラウンドにある「日本ラグビー蹴球発祥記念碑」

しかし日本人の対戦相手はなかなか育たず、一度始まってでも定着しないまま10年が経過する。慶應の選手たちは、ラグビーの普及に腐心し、元オールブラックス主将の著作を参考に慶應義塾蹴球部編『ラグビー式フットボール』と題する案内書を刊行。さらに他校を直接勧誘し指導に赴いて、ようやく初めての対戦チームとして育ったのが京都・第三高等学校であった。日本初の対戦試合が行われたのは1911年4月8日のことで、以後同志社、早稲田などが続いた。

日本人が競技を開始し、そして普及していった原点として、慶應義塾が日本におけるラグビー発祥のルーツであることに揺るぎはないと確信する。(都倉)



## 「私のレオン・ド・ロニー研究」

関西学院大学文学部准教授 Chris BELOUAD  
(クリス・ベルアド)

### ロニー研究事始め

私は日仏文化交流史を専門分野としている。日仏交流160年の歴史の初期、「幕末」と「明治時代」に焦点をあて、特にフランスにおける日本文化の受容という課題に取り組んでいる。そう聞いて、「ジャポニズム」というキーワードを思い浮かべる方も多いかもしれない。ジャポニズムも視野に入れてはいるが、私の関心は、むしろ「ジャポニズムと同じ時期にあった日本文化の受容のさまざまな側面」にある。

私は今まで、レオン・ド・ロニー (Léon de Rosny, 1837-1914) という人物を研究の「軸」に据えてきた。一言で紹介すると、フランスにおいて日本学および日本語教育の草分け的な役割を果たした人物である。私がロニーと出会ったのは12年前のことだ。大阪大学大学院の博士後期課程に入学する準備に取り組んでいた頃だった。研究テーマの選択に悩んでいたところ、指導教員の五之治昌比呂先生からのヒントをいただき、ロニーについて調べ始めたのがきっかけである。

ロニーは東洋学者のスタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien, 1799-1873) のもとで中国の言語と文化を学び、ジュリアンの勧めによりほぼ独学で日本語を習得し、日本語に関する書籍を発表する。1862年に文久遣欧使節団がパリを訪れた際、福沢諭吉をはじめとする随行員の案内役を務め、彼らとの交流を通じて日本語や日本文化に関する知識を得た。ロニーは翌年、パリの東洋語学校で「無料の公開講座」を開講し、1868年に正式な「日本語講座」が開設されると、その初代教授となった。1880年代までは、日本語の教科書や日本文化論を数多く執筆するが、それ以降は日本学から次第に離れ、宗教文化に関する研究に関心を移し、晩年は特に仏教に関心を寄せた。

最初の文献調査で、上記の通り、ロニーの生涯と活動を概ね把握できた。同時に、ロニーに関するフランス語の学術研究が非常に少ないということも分かった。さまざまな理由が考えられるが、結論として、ロニーは2000年代までフランスでほぼ忘れられた存在だったという過言ではない。一方、日本では1970年代からロニーに関するいくつかの研究が行なわれてきた。当時のロニー研究の代表的な論文は、松原秀一先生が執筆した2篇である(『福沢手帖』第2号, 1974年, pp. 1-10および『慶応義塾大学福沢研究センター近代日本研



LÉON DE ROSNY  
Professeur à l'Ecole  
des Langues Orientales

究』第3号, 1986年, pp. 1-56)。

日本人の視点から取り組んだそれらの研究は、当然ながら、ロニーの日本語教育者としての活躍と福沢との交流という二つのテーマに焦点を当てたものが多かった。そこで、博士論文では、先行研究で見逃がされたロニーの活動へと視野を広げ、ロニーの「全体像」を描くことを試みた。「全体像」をとらえるにあたって、ロニーが祖国で忘れられた理由を追求する必要もあり、併せてこの課題にも取り組んだ。

この博士論文が、私のロニー研究のスタートラインである。手探りで挑んだがゆえに、成果が出せた部分もあったが、行き詰まりも少なくなかった。博士号を取得してからもロニー研究を継続し、日仏両国でさまざまな形(論文、発表、共著)で成果を公表している。

### 最初の研究業績の公表が開いた新しい道

2011年に、大阪大学の紀要にロニーに関する論文を発表した。当時まだ博士後期課程在籍中だった私は、博士論文の執筆準備の一環として、この紀要論文をフランス語で執筆する。論文は同年に電子化され、大阪大学のオンラインリポジトリにアップロードされた。すると驚くことに、これがロニーの曾孫の目にとまったのである。元ジャーナリストのベネディクト・ファール＝ミュラー氏 (Bénédicte Fabre-Muller)、元モンペリエ第三大学准教授のフィリップ・ロスシュタイン氏 (Philippe Rothstein) の2人だ。彼らとピエール・ルブルール氏 (Pierre Leboulleux) は、ロニーに関する資料を保存公表し、研究を推進すべく、大学教員との連携を望んでいた。ロニーを再評価しようとしたフランス人は、私だけではなかったのだ。彼らがインターネットで私の紀要論文を見つけたことをきっかけに始まった交流は、共著やインタビューなど研究協力へと発展し今も続いている。当時、まだ博士論文さえ提出しておらず、研究者の道を歩み始めたばかりの私だったが、ファール＝ミュラー氏らとの出会いのおかげで、研究を広く公表する重要性にいち早く気づかされた。

### ロニー研究に関する資料の問題

日仏文化交流史という枠組でロニーを研究し始めると、まずロニーに関する資料が非常に限られているという問題が目の前に立ちだかった。交流やネットワークの観点から史学研究を行なう場合、書簡は重要な資料になるが、ロニーは遺言で妻に書簡を処分するように命じたため、受け取った手紙はほとんど残っていない。もちろん、ロニーが送った手紙の一部は残っているので書簡

が全くないわけではないが、「ロニー・パズル」には極めて重要なピースが欠けている。

また、日本文化の受容という観点からロニー研究を行なおうとしても、やはり似たような問題に直面する。ロニーが師のジュリアンから受け継いだ中国関連の書籍と、自身が集めた日本関連の書籍は、遺言により地元のリール市に寄贈された。しかし、寄贈の条件として、他の図書館や教育機関への貸し出しなどをロニーは禁じたのである。

1994年に、ケンブリッジ大学の日本学者ピーター・コーニッキー (Peter Kornicki) が「ロニー文庫」の日本関連書籍の目録を作成し、ヨーロッパにおけるロニー研究に必要な不可欠なツールを与えたが、それまで100年近くの間、ロニー文庫はリールの市立図書館に眠ったままだったのだ。ロニー文庫に簡単にアクセスできなかったこともまた、ロニー研究が長い間進まなかった理由の一つであるといえる。

#### 研究の一例：2018年度の雑誌特集「19世紀における日仏交流の立役者」

最後に私の最近の研究の一例を紹介したいと思う。本稿の始まりに述べたように、ロニー研究を軸に、ただしロニーに限らず、日仏文化交流史全般を研究している。そして、ジャポニズムの時代の、ジャポニズム以外のフランスから日本への眼差しにもっとも関心を持っている。2018年には、まさにこの課題についての研究成果を公表する機会に恵まれた。日本で明治維新150周年にあたるこの年、日本とフランスでは日仏交流160周年という節目を迎え、パリをはじめフランス各地で「ジャポニズム2018：響きあう魂」という複合型文化芸術イベントが行われた。この一連のイベントに際して、より多くの人にロニー関連の研究成果を公表すべく、フランスの研究誌 *Historiens et Géographes* (『歴史学者と地理学者』) にて日仏文化交流史の特集を企画編集した。

概ね19世紀後半を枠とし、学問、外交、芸術などの分野で活躍した人物を通して、日仏交流のさまざまな側面を紹介し、それぞれの問題も取り上げる構成を採用した。また、この機会に、日仏文化交流史に関する日本での研究をフランスに紹介するため、日本人の研究者4名に執筆を依頼した。

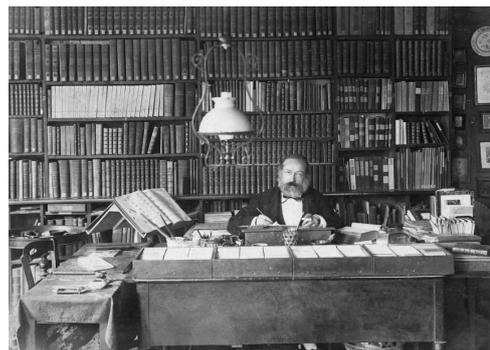
福沢研究センターの西沢直子先生には「福沢諭吉のフランス滞在と新しい智の形成」という論文を投稿していただき、そのタイトルの通り、福沢諭吉がフランス滞在からどのような知識を得たか、それらの知識からどのような智を形成したかというプロセスに焦点を当てられた。私が投稿した論文では、フランス側の視点から、ロニーの活動を中心に、「フランスの日本学」という学術分野の誕生を描いたが、その誕生にまつわる問題も取り上げた。西沢先生に加えて、慶應義塾大学からもう一人の先生の協力をいただいた。法学部の岩谷十郎先生は、

お雇い外国人のギュスターヴ・ボアソナード (Gustave Boissonade, 1825-1910) の活動を扱った。日本の法制度の形成にまつわる諸問題、不平等条約改正という重要課題をはじめ、近代化する日本がとらわれていた問題をボアソナードの目線から見ることができる。不平等条約の問題は、ボアソナードと同じ時期に日本に滞在していた諷刺絵師のジョルジュ・ビゴ (Georges Bigot, 1860-1927) の人生にも影響を与えた。清水勲先生による論文では、ビゴが明治の日本へ注いだ眼差しを知ることができる。同じ時期の日本を生きたフランス人同士でありながら、ボアソナードとビゴは異なる眼差しで日本の近代化を見ていた。岩谷先生と清水先生の論文では、「フランス人から見た日本」が取り上げられているのに対して、寺本敬子先生の論文では、日本人の立場から文化受容の諸プロセスと、そのプロセスにまつわる問題が取り上げられた。1878年のパリ万国博覧会で事務館長を務めた前田正名 (1850-1921) を例に挙げ、この問題について考える機会が与えられた。

#### 今後のロニー研究

グローバルが進むなか、国家間の文化交流および学術交流の嚆矢とその後の展開をより明確にする意義が高まっている。フランスとヨーロッパ諸国でも、日本学と日欧交流の研究が盛んに行なわれており、私の研究に限らず、ロニーの再発見と再評価の機運が高まっている。リール第三大学は2015年に、*Genèse des études japonaises en Europe : autour du fonds Léon de Rosny* (『ヨーロッパにおける日本学の源流—レオン・ド・ロニーの蔵書—』)、2018年に、*La circulation des savoirs entre l'Asie et l'Europe au temps de Léon de Rosny* (『レオン・ド・ロニーの時代の日欧間の知の交流』) というシンポジウムを開催した。2020年に出版予定のシンポジウム論文集 *Genèse des études japonaises : autour du fonds Léon de Rosny* (『ヨーロッパにおける日本学の源流—レオン・ド・ロニー文庫—』) には、西沢直子先生と私も分担執筆者として参加した。

今後はこのように共同研究を続けながら、過去12年間にわたった研究の中で生じた疑問に答える形で、自身のロニー研究も続けていきたい。これからまだまだ、多くの発見がありそうだ。



## 梨花史学研究所・梨花女子大学史学科・福沢研究センター共催 日韓の歴史をめぐるワークショップ

梨花史学研究所との部局間協定による学術交流は、6年目に入った。この間研究者の交流や訪問研究の受け入れ、大学院生の夏期・冬期研修が行われ、大学院生や若手研究者による研究報告とアーカイブズ研修から成るワークショップも4回実施された。ワークショップの第1回および第2回については、それぞれ『福沢研究センター通信』第25号および27号で報告したが、2018年に韓国で実施した第3回については、まだ詳細をお伝えしていなかったため、本年度の第4回と合わせて、本号にて報告する。なお、第1回より第3回までは、近現代史を対象とし「日韓近現代史をめぐるワークショップ」という名称で行ったが、2019年は7世紀や11世紀の報告も行われたため、タイトルを「日韓の歴史をめぐるワークショップ」と変更した。

2018年度のワークショップは、8月27日から30日にかけて、ソウルの梨花女子大学、ソウル大学、高麗大学を会場として行った。2016年、2017年のワークショップでは、佐倉市の国立歴史民族博物館や国立公文書館でのバックヤードも含めた見学が、たいへん有意義なものとなったので、第3回目はぜひとも韓国で開催し、韓国のアーカイブズ見学を行いたいという希望があった。りそなアジアオセアニア財団が国際学術交流助成を行っていることを知り、応募したところ、41万円の助成金を得ることができた。そこで財団による助成金、福沢基金、服部基金の国際交流予算を利用し、第3回目はソウルでの実施が実現した。

まず8月27日は梨花女子大学において、梨花歴史館および梨花女子大学博物館を見学した。特に梨花歴史館は、最初の校舎を復元した建物の中に、創立当初梨花学堂の頃からの大学の歴史が展示されていて、写真やジオラマを用いながら工夫を凝らした展示がなされており、今後の福沢研究センターの活動に大いに参考になった。

翌28日は梨花女子大学において、終日研究発表会を



行った。各報告の内容は以下の通りである。最初の報告は柄越祥子氏(福沢研究センター)による「東京の私立学校と教育勅語—慶應義塾幼稚舎を中心として」で、東京の私立小学校への教育勅語の下付とその運用をみることにより、近代日本における私立学校の位置を検討する発表であった。従来の研究では、御真影の奉戴と教育勅語謄本の下付の強要は1930年代に始まり、それ以前の特に私立学校は、あたかも教育勅語体制とは一線を画す教育を行っていたかのように見られていたが、実際には明治期にすでに多くの私立学校に下付され、1900年に降に登場した「児童中心主義」を掲げる小学校でも例外ではなかった。教育勅語のオルタナティブとされたモラルコード「修身要領」を徳育の中心に据えていた慶應義塾幼稚舎でも同様であり、しかも当時の森常樹舎長は矛盾を感じている様子はなく、それは教育勅語には解釈の余地が残されていたことを示し、ゆえに明治期から残った学校も、新たな教育目標を抱えて登場した学校も、政府と軋轢を生むことがなかったが、無意識に建学の精神や教育理念が侵食され、無自覚に天皇制公教育体制の一翼を担うことになったのではないかという指摘であった。

第2報告は、安基愛氏(梨花女子大学大学院)による「大正期の侍従武官の役どころと実際—四竈孝輔の日記を中心に」と題した報告で、



1917(大正6)年から1923年まで侍従武官を務めた四竈孝輔が残した日記の分析により、大正期の侍従武官の役割を考察した。侍従武官は勅令による規定に基づき、天皇を補佐した。陸海軍の現役軍人が親任されるため、特に軍事的性格を持つ業務においてその役割が顕著となったとし、各種行幸と儀式、軍関連視察などの天皇公務に、侍従武官の特殊な性格がよく表れていると述べた。大正天皇はその個人的特性によって、強靱な君主としてのイメージを構築・維持することが容易ではなく、侍従武官は天皇の日常の相当多くの部分で関与しており、そのため侍従武官の維持は、天皇の軍事的役割とイメージを強

化するという側面で把握することができるかと考察した。そして日記は、「軍事的なイメージの維持・継承」という脈絡からも理解することができるであろうと述べた。



続いて第3報告の岡部敏和氏、小林伸成氏(ともに福沢研究センター)は、日本にとって近代のはじまりである明治初期に、近世末期を迎

えていた琉球に着目した発表で、最初に中国(明・清)と日本(薩摩)との間で複雑な立場が続いていた琉球国をめぐる、明治以降日本政府による「冊封」、さらには「琉球処分」が行われていく状況が説明され、個別報告に入った。小林報告「『異国船』への対応をめぐる琉日関係」は、琉球藩王冊封後に発生した異国船問題をまとめ、琉球国がいかにかこれらの対外問題に対応していったか、「近代日本」の中において「近世琉球」がとった言動について、琉球側の視点からの分析であった。小林氏は漂着も含め渡来した異国船に対する処理の事例から、琉球国は琉球藩王に冊封されて以後も、少なくとも「外交」権においては自国の権利を行使し、明治政府から見て「藩」となっても、国際社会との関係は維持しつつ、いまだ「琉球王国」という意識を持っていた。すなわち取り上げた事例の1872(明治5)～1874年頃では、琉球の「近代」はまだ先で、必ずしも日本の「近代化」とリンクはせず、大きく関係が変化するのは、1875年5月以降、琉清関係の断絶命令が下されてからであったと指摘した。

岡部報告「琉球処分と新聞報道—福沢諭吉の琉球・沖縄観との比較から—」は、従来1879年の「琉球処分」前後に限られていた、琉球・沖縄を扱った日本(本土・内地)の新聞記事の調査の幅を広げ、特に福沢諭吉の論説に着目し、他の論説との比較を試みた。その結果1879年以前から「大新聞」各紙は、琉球について単に事実関係を一方的に報じるだけでなく、外国の新聞を翻訳紹介し、また読者からも投書が寄せられて、すでに琉球・沖縄が日本国民の強い関心事の一つとなっていたことがわかった。1875年頃には、日本国民にとって琉球・沖縄が日本の属国(藩属)であることは当然なものとなり、各報道は「琉球処分」を内政上の問題として扱い、日清間で外交上対立する問題とするべきではないと論じていた。こうした認識は福沢諭吉にも見られるが、「琉球処分」をめぐる悪化する日清関係への対応については「大新

聞」各紙と比べて大きく相違し、福沢は清国との最良の交際を図るためには、何よりも武備拡張を行うべきだと考え持論を展開した。岡部氏は、領土問題を含め、国権を守護するための国際情勢下における、国家間のパワーバランスに対する両者の理解の差であると分析した。

第4番目の報告は、金瑞淵氏(梨花女子大学大学院)による「George McAfee McCunelの韓国認識—Korea Todayを中心に」で、「宣教師の子供世代」研究が持つ重要性を認識して、その代表的人物であるジョージ・マッキューンの生涯や彼の学問的軌跡を分析した。マッキューンは学問的専門性を認められ、米情報機関で働き、「韓国専門家」と呼ばれ、戦後はアメリカの主要大学で韓国学を発足させた。彼の活動や学問的特徴は、第一に少年期の韓国における経験から、他の西洋人研究者が持っていたような韓国および韓国人への偏見にあまり影響を



受けなかったこと、第二に修士と博士学位論文はともに史料に基づいて念入りに考査分析を行ったものの、従来の学者たちの主張と大きく異なる脈絡の論旨を持たず、しかし実際に韓国で暮らし、韓国人と深く交流し、三一運動を目撃したマッキューンは、植民統治の絶対的な収奪性と搾取性を疑うことがなかったこと、さらに第三に韓国学という学問をアメリカのオーソドックスな学界へ編入させることに、彼は余生を投じたと考察した。

各発表後、梨花女子大学人文大学校史学科の先生方によるコメントがあり、質疑応答の時間を設け、活発な討



論がなされた。また終了後懇親会が行われ、双方の教授陣も含め交流がはかられた。

翌29日の午前中はソウル歴史博物館を見学、企画展示室ではソウルオリンピックに関する企画展が開かれていた。その後ソウル大学で昼食をとったあと、午後



ソウル大学奎章閣

はソウル大学内にあ  
る文書館、奎章閣を見学した。奎章閣では版本に関する展示が行われており、また展示室だけでなく、念願の収蔵庫等のバックヤードを見学させていただくことができた。温湿度管理や防虫対策など資料保存対策を学び、さらに資料収修復の現場では補修やクリーニング作業について学んだ。



高麗大学博物館

最終の30日は、朝鮮から慶應義塾への初めての留学生で、のちにアメリカにも留学、近代朝鮮において活躍した兪吉濬の資料を保管している高麗大学博物館を訪れ、資料を閲覧した。同博物館では他に、明治期の慶應義塾への留学生の息子で高麗大学の総長を務め、文学者で大韓民国憲法の起草者でもある兪鎮午

(1906～1987) 関係資料も所蔵しており、紙質が悪くなっている現代資料の保存対策も学ぶことができた。

今回、研究報告はもちろん、個人では見学することが出来ない施設や資料に接することが出来たこと、また韓国のアーキビストや学芸員の活動を目の当たりに出来たことは大きな励みとなった。尽力くださった白玉敬先生、咸東柱先生をはじめ、梨花女子大学人文大学校史学科の諸先生方に深く感謝を申し上げたい。今回宿舎は梨花女子大学の寄宿舎を利用させていただき、移動の際には以前准訪問研究員として1年間福沢研究センターに滞在した梁熙晶氏を始め、大学院生のみなさんの協力で非常に有効な時間を過ごすことが出来た。重ねて感謝し、また助成をいただいた、りそなアジアオセアニア財団、そしてソウル大学の徐毅植先生や奎章閣の先生方、高麗大学

の崔徳寿先生や博物館学芸員の徐明一先生にも紙面を借りてお礼を申し上げたい。

2019年は、再び慶應義塾大学三田キャンパスを中心に、7月4日5日の2日間開催した。

4日は国立公文書館の見学を行い、企画展示「紙に願いを一建白・請願の歴史」やバックヤードの見学を行った。所蔵資料等を紹介したビデオや日本のアーカイブズの状況に関する説明のほか、修復作業室を見学し、多くのことを学んだ。

午後は三田キャンパス南館5階ディスカッションルームで、尾立和則元京都造形大学教授による紙資料の保存や修復に関する講義と実習があった。尾立先生は日本に止まらず世界の様々な紙を呈示しながら、紙質の特徴や適した保存方法を講義されるとともに、修復については実際に教材を作成してくださり、梨花女子大学・福沢研究センター双方の教職員も加わって実習を行った。資料修復は初めての経験であった者が多く、今後の調査や業務に非常に有意義な実習となった。尾立先生には多くの準備をしていただき深く感謝申し上げる。

5日は研究報告会を行った。午前中は「留学をめぐる2つの事例報告—ジェンダー的視点から」と題し、具知會氏(福沢研究センター)「明治期渡日した朝鮮女子留学生 1890年代を中心に」と西沢直子(同前)「小幡基三郎のアメリカ留学」の報告があった。

具氏は、これまで男性しか掲載されていないと考えられていた『慶應義塾入社帳』(明治期の慶應義塾の入学記録。1986年に慶應義塾より全5巻の復刻版刊行)に、「金蘭史」という女性が記載されていることを明らかにした。同資料は性別が記入されていないため、女性が他にも



存在する可能性が全くないとはいえないが、日本人女性と考えられるデータはなく、おそらく記載された唯一の女性であると思われる。また新聞記事の調査から、海外文物に接する機会が多かった官僚出身の男性の影響を受け、自ら勉学に強い意志を持ち、夫または男性親族の支援を受けて、夫などの身近な男性と共に留学する朝鮮女性が他にもあったことを明らかにした。彼女たちは国内外の情勢をよく認識しており、皆先進的な文明を学ぼうとする情熱と女子教育に対する関心、そして留学の先駆者としての義務感を持っていたが、不安定な時代状況の

影響で、帰国後教育活動を長く続けることができず、また政治状況の変動により、留学そのものを断念せざるをえなかった女性たちが少なくなかったことを指摘した。



西沢報告は、幕府開成所で英学を教え、慶應義塾では明治初期に塾長も務めた小幡甚三郎が、旧藩主とともに留学したアメリカで精神的に追い詰められた原因のひとつとして、彼の手紙からジェンダーバイアスによる苦悩があったのではないかと推測した。また留学先であった

Polytechnic Institute には他にも旧藩主たちとその従者がおり、海外の地で封建的情誼が持続され続けたことや、岩倉使節団に同行した女子留学生たちは「維新の敗者」かそれに近い立場の子女であったという田中彰氏の指摘から、明治期の海外留学が、むしろ日本の伝統という美辞のもとに男女の役割を固定化するベクトルも持っていたのではないかと述べた。

午後に入って第2報告は、朴チョロン氏(梨花女子大学大学院)による「重畳される同心円の世界 真徳王～文武王代における羅唐の礼制対立を通して考察する新羅の天下観」で、近年の東アジア世界論で取り上げられる高句麗流民・安勝に対する新羅・文武王の冊封を分析するにあたって、新羅が持つ自国と天下の認識を長期的な観点でみる必要があると指摘し、唐との対立の中で新羅が取った処置は、中国が構築してきた礼制を援用することで、唐中心の世界とはまた違う独自の位階を設定しようとした試みであったとした。文武王代に見える一連の様相を真徳王代の事例を通じて分析すると、それは羅唐関係の悪化と「統一」による一時的な自尊心の高まりによるものではなく、むしろ新羅が長い間構築してきた礼制への理解が反映されたものと考えられ、新羅の天下観は自国を中心とした新羅なりの天下への理解と、唐が構築した天下の中の一國という二重の形で一貫して維持されていたことがわかると分析した。中国のみならず、前近代の韓国、日本、ベトナムはすべて、自国を中心とする同心円的世界を持ちながら互いに交流し、こうした同心円が互いに重なる時、歴史的な経験と現実的な状況認識



の間で位階を調整していたとの見解が示された。

第3報告は丁拏映氏(梨花女子大学大学院)で、「興遼国の成立と高麗・顕宗末期(1029～1031年)における対契丹・女真外交」と題し、顕宗代末期、高麗は興遼国と契丹両国から救援要請を受けたが、これを断り事態を静観したことについて、高麗が興遼国と契丹両国の衝突に介入しなかったのは、国内の安定化に集中し、興遼国の攻撃に備え、北方地域で国境の強化策をとったからであるとした。外交問題を引き起こしかねない政策であったが、当時の遼東地域をめぐる情勢変化がそれを可能にした。興遼国の反乱は、女真と鉄利、高麗が契丹の東京で交易していた互市を妨げ、3国の関係に変化を生じた。特に鉄利国が「暦日」を要請したことや、西女真の高麗への来朝・来附事例の増加は、興遼国反乱との関連があると考えられ、契丹の東京で起こった興遼国反乱は、契丹内部や高麗と契丹関係のみならず、高麗と女真関係まで含む、当時の東アジア情勢と関連した重要な事件であったことが指摘できると考察した。



今回古代史・中世史の報告者を得て、それぞれの分野の研究者である東京農業大学第三高等学校教諭中野高行氏および開成中学校・高等学校教諭近藤剛氏にコメントをお願いし、活発な討論をすることができた。おふたりには深くお礼を申し上げるとともに、おふたりの呼びかけでご参加いただいた古代中世史の研究者の方々にも謝意を表したい。今回は梨花女子大学・慶應義塾以外からも多くの参加者を得ることができた。

研究発表終了後は、梨花史学研究所との部局間協定締結から5年が経過することを受け、協定の更新式を行った。梨花女子大学からは梨花史学研究所長の鄭惠仲教授と金英美教授、および梨花女子大学大学院生たちが参加し、鄭所長と井奥成彦慶應義塾福沢研究センター所長が協定書にサインを行い、研究協力関係を継続することになった。

更新式終了後は懇親会を行い、交流を深めた。今後も継続してワークショップや研修生受け入れを行うとともに、関係をさらに発展させて双方の研究に寄与できるよう努力したい。

(文責：西沢直子)

## 2019年度 中津市アーカイブズ講座報告

毎年恒例となった、福沢研究センター夏休みワークショップは、本年度、未来先導基金の補助を受けられず、またその他の予算的措置の目処が立たなかったことから、残念ながら見送りとなった。例年、高校生から大学院生まで、慶應義塾内で参加者を募り、大阪や中津を巡り、中津市アーカイブズ講座の初級の部とも位置づけられてきた。本年は慶應からの参加者は無い形で、8月8日～9日の2日間にわたって、地元の東九州龍谷高校生2名の参加によって実施され、古文書の入門的講義(担当：都倉)、襖の下張剥がし実習(担当：元京都造形芸術大・尾立和則氏)、福沢記念館見学が行われた。

一方、中津市アーカイブズ講座(中級の部)は、8月8日～12日の、4泊5日の日程で行われた。例年通り、襖の下張剥がしの実習(担当：元京都造形芸術大・尾立和則氏)と、剥がされた資料の撮影実習(別府大・洗裕理氏)、剥がされた資料の目録作成として自性寺襖下張文書(久留米大・吉田洋一氏)、森家襖下張文書(慶應・都倉)が行われた。これに加えて、本年は旧家などに伝来した資料群(バラされていない形で伝わった資料)の整理作業も取り入れることとなり、菊地家室屋<sup>むらや</sup>文書(慶應・井奥成彦氏)、梅田家文書(慶應・西沢直子氏)、耶馬溪公民館資料(別府大・針谷武志氏)の目録作成実習が行われた。例年とは異なり、豊富に情報が得られる資料に適切な名称を付して目録化する作業も行うことができるようになり、扱う資料の多様化によって、より充実した実習となった。

これとは別に、中津市立小幡記念図書館に保管されている中津市学校旧蔵洋書の目録作成作業も、アーカイブズ講座に合わせて行われた。

参加者は別府大学より学生19名、同大学院生1名、久留米大生2名、九州大院生2名のほか、中津市民の参加が今年も行われ、学生に混じって4名の方が、熱心に古文書解読に取り組む姿が見られた。当センターより調査員5名(TA：加藤学陽、白石大輝、高野宏峰、横山寛の各氏〈以上目録実習〉、中村亮氏〈洋書担当〉)、資料館

等に勤務する別府大卒業生3名、同じく久留米大卒業生1名がTAとして参加した。

例年は小幡記念図書館のホールを会場としてきたが、本年は8月3日に開館したばかりの「新中津市学校」(旧中津市歴史民俗資料館建物)の2階を会場とした。

(文責：都倉武之)



襖の解体作業(初級の部)



菊地家室屋資料の整理作業



襖下張文書の目録作成作業



本年度の講座会場  
(新中津市学校2階)



中級の部参加者たち(福沢記念館にて)

## 「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト 大阪特別企画展Ⅱ 「忘れられた戦争のカケラ」開催報告

都 倉 武 之

2019年7月24日(水)から8月13日(火)の期間、慶應大阪シティキャンパスにおいて、当センターの「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトによる大阪で2回目の展覧会「忘れられた戦争のカケラ」を開催した。

この展示は、同プロジェクトが昨年12月に開催した学徒出陣75年記念シンポジウムの内容の一部を大阪でも発表するという趣旨で企画が始まり、その機会にあわせて2016年以来2回目の展覧会も行うこととなったものである。展示内容を下記に簡単に紹介したい。

### ①オリンピックと戦争

戦前のロサンゼルス五輪(1932年)、ベルリン五輪(1936年)を中心に、慶應義塾ゆかりの選手たちの活躍とその後の戦争中の運命について展示した。特にロスで銀メダルを獲得し、1945年に硫黄島で戦死した河石達吾、ベルリンに出場した陸上選手で1939年に中国で戦死する鈴木聞多、同じくベルリンで水泳背泳ぎで6位入賞を果たし、1945年に沖縄で戦死した児島泰彦は、多様な資料の存在を確認し、この機会に紹介することができた。

### ②陸軍中野学校

1938年に発足し、国家間の水面下での「秘密戦」を戦うための要員を訓練した陸軍中野学校については、2016-17年にメディア・コミュニケーション研究所の筆者のゼミで学生達が共同研究を行い、関係者との関係を構築した。本展では、同校第1期生18名のうち2名が慶應義塾出身者であったこと、その2名(亀山六蔵と宮川正之)の遺族が所蔵していた資料を紹介した。その中にはアフガニスタンに駐在していた亀山の使用したトルコ語の辞書や、ポルトガルなどに駐在していた宮川が残した旅券や動画などもある。

### ③上原良司とその家族

「自由主義者」と自称する有名な遺稿を残した戦没学徒として知られる上原良司とその家族については、昨年度末に資料目録を刊行したことを本誌前号で報告したが、本展では、上原良司にまつわる膨大な資料と共に、彼の2人の慶應医学部出身の兄良春と龍男(共に軍医となり戦没)についても残されている膨大な資料の存在を

紹介し、上原良司を相対化し、一家の歴史と時代の中に良司像を再構築する必要性を展示を通して投げかけた。龍男が自作したカルタやユーモラスなイラスト入りの海軍でのノート、良司の遺本『クロオチェ』(恋人へのメッセージが隠されていることで有名)や、最後まで生存が信じられていた長男良春の死を1946年に知った際の父寅太郎の日記など、多様な資料を展示した。

### ④旧海軍日吉台地下壕

日吉キャンパスの地下に現存する旧連合艦隊司令部地下壕などの巨大な海軍地下壕については、余り広く知られていないが、実際に使用されたいわば「戦場」であった。1944年から構築されたこの戦争遺跡に残されていた若干の遺物や、内部の様子を撮影したVR映像を展示した(文学部教授安藤広道氏の全面協力による)。

これらの展示は、タイトルの通り、戦争の多様な側面の「カケラ」である。しかし、広く語られる戦争の歴史からこぼれ落ちる「カケラ」から戦争のどのような側面に光が照らされ、どのような可能性を持つか。このようなことについての問題提起の機会にできたものと考えている。展示資料の総数は約80点であった。

なお、8月4日(日)には、前述の安藤氏、日吉台地下壕保存の会副会長で上原良司研究者の亀岡敦子氏、当センター調査員横山寛氏、そして筆者により展示と関連する研究報告を行い、70名余りの来場があった。

当プロジェクトでは引き続き「慶應義塾と戦争」をテーマとして研究報告や展示など、問題提起の機会を設けていきたいと考えている。



会場風景

新収資料紹介

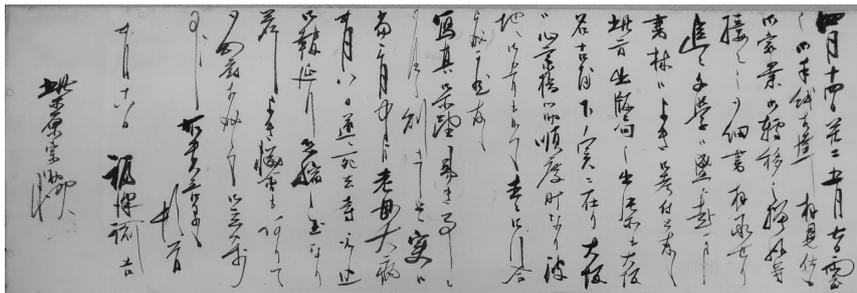
平成31年3月から平成31年9月までの間に、福沢研究センターに収蔵された主な資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料をご紹介することができず申し訳ありません。

■ 柴原宗助宛福沢諭吉書簡 明治7年5月18日付 1幅 【購入】

柴原宗助の書店開業につき、よき考えであると述べると共に、所望された写真を送ることを告げたもの。『福沢諭吉書簡集』(全9巻、岩波書店、2001～3年)に未掲載の新資料である。

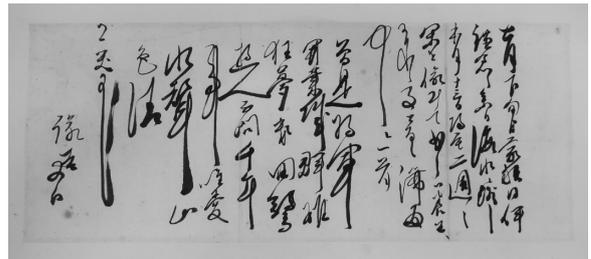
柴原宗助は慶應義塾に入学あるいは特選塾員になった形跡はないが、福沢諭吉の「明治十年以降の知友名簿」によれば、「備中高梁」の人で「明十年十二月一日来状写真贈来」とある(『福沢諭吉全集』第19巻、岩波書店、1971年、p.334)。この書簡の発信年は、文中に「三月お老母大病、五月八日遂に死去」とあることから、明治7年であることがわかる。文中に「御家業御転移」とあるが、書店開業までの柴原の職業は不明である。福沢は追々文学が盛んになるので、書店はよい考えであると述べている。また慶應義塾出版局は大阪(心齋橋筋順度町)、名古屋、下関に出張所があり、大阪に行った際には直接売買取引をするようにも伝えている。

資料は書幅仕立てになっており、中村正直が福沢同様写真の所望に応える書簡と、書籍の取引等について書かれた木平讓(人物情報未詳)の書簡が貼り込まれている。



■ 宛名未詳福沢諭吉書簡 明治21年月日未詳 1幅 【購入】

家族同伴の鎌倉での休暇を報告し、その際の漢詩を披露したもの。宛名も日付もなく「又白」とあるので、追伸部分のみかもしれない。発信年は7月下旬に鎌倉を訪れていることから、明治21(1888)年と推測される。この年は途中単身で一時帰京しながら、7月19日から8月13日まで鎌倉に滞在した。福沢は避暑や海水浴のために、判明しているだけで、生涯で5回ほど鎌倉を訪れている。明治21年は子どもたちを同伴し、長谷観音前にある三橋旅館に滞在した。同旅館は文化年間にはすでに旅宿を営んでいたといわれ、明治年間になると規模を拡大し、多くの有力者が逗留した。ただ東海道線が整備され、鎌倉東京間の所要時間は2時間半から3時間余りとなったので、福沢はゆっくり休んでもいられず、7月30日に一度東京へ戻り、堀越角次郎や平野理平にあって用事をすませ、再び8月3日鎌倉を訪れた。



鎌倉滞留中に作ったものとして「曾是將軍開業城 群雄狂夢幾回驚 遊人不問千年事 唯愛水声山色清」(幾多の武将が夢を追った往時には思いを馳せることなく、遊びに訪れている自分達は今ただ景色の清々しさを愛する)の七言絶句の詩が添えられている。

■ 『明治九年九月一日ヨリ十二月八日迄 慶應義塾学業勤惰表』 1枚 【購入】

在学生の成績表である「慶應義塾勤惰表」(もしくは勤怠表)は、最も古いものが明治4年4月のもので、当初は月毎、明治6年3月からは学期ごとに発行され、明治31年の第3学期まで続いた。途中明治5年7月、12月、明治9年9月から12月分は残存資料がなく、発行されたのか否かも判明していなかった。今回はそのうち明治9年のものを入手することができ、同期間の在校生の情報を補填することができた。

## 主な動き

### ■ 図書館旧館改修工事の動き

2017年2月から始まった図書館旧館の改修工事（免震化と劣化箇所の修繕）が2年4か月の工期を経て本年2019年5月末に終了した。

6月14日には完了式を開催、長谷山塾長から工事関係者に感謝状が贈られるとともに、免震レトロフィット工法の紹介や、改修された現場の見学・説明会が行われた。

年明けから内装工事に入り、工事終了後にセンターは本来の場所である旧館にもどる予定。

### ■ センター公開講座

日吉キャンパスで開講している設置講座「近代日本と福沢諭吉 I」において、今年度は3名のゲストスピーカーをお招きして公開講座を開催した。講師と演題は以下のとおり。

早稲田大学非常勤講師佐藤能丸氏：「福沢諭吉と大隈重信 早稲田大学の歴史」（6月24日）

塾員（昭44経）・世界空手連盟事務総長奈藏稔久氏：「慶應義塾とスポーツ」（7月1日）

常任理事岩波敦子：「あなたは慶應義塾を知っていますか」（7月15日）

また、7月8日にはリトアニアで制作されたドキュメンタリー映画「カウナス スギハラを、日本を想う」を上映した。この映画ではリトアニアの都市カウナスと日本との架け橋になった4人の人物、福沢諭吉、ステポナス・カイリーヌ、マタス・シャルチュス、杉原千畝を取り上げている。

### ■ 国際交流

2014年から部局間の相互協力協定を締結している韓国梨花女子大学から研究者および学生が来日、7月4日から5日にかけて第4回めとなる日韓近現代史をめぐる合同ワークショップを開催した。梨花女子大学から2名、慶應から2名の研究報告があった。

なお、本年は相互協力協定の更新の年となっていたため、5日に調印式をおこなった（ワークショップの詳細はp.6-7参照）。



### ■ 新中津市学校開校式

このほど中津市歴史民俗資料館（小幡篤次郎生誕地）が改修され、明治4年～16年に存在した中津市学校の精神を継承する新中津市学校として生まれ変わった。

中津市長、塾長らが参列して8月3日に開校式が挙行された。

### ■ 慶應大阪シティキャンパス（KOCC）におけるセンター講座

今年度は「関西の福沢山脈」をテーマに以下の4名が講義を担当することになった。2017年度と同じテーマであるが、今回は前回取り上げたような財界で活躍した慶應義塾出身者に限らず、教育・文化の面で活躍した人物にも対象を広げている。

2019年12月7日（土）

福沢研究センター教授西沢直子

「明治初期福沢諭吉の洋学校支援と慶應義塾分校 ー旧「智」から新「智」へー」

2020年1月11日（土）

福沢研究センター准教授都倉武之

「小泉信吉・信三父子と「気品」と『帝室論』」

2020年2月8日（土）

大阪大学名誉教授宮本又二郎氏

「武藤山治ー『独立自尊』を實踐し、紡績王国を築いた企業家ー」

2018年3月28日（土）

名誉教授・センター顧問小室正紀

「摂州三田藩の人々と福沢諭吉」

### ■ 所員の活動

センター専任所員による講演・講義は諸記録のとおりであるが、以下の行事にも所員の協力を得た。

看護医療学部教授山内慶太、理工学部新任教員ガイダンスで講演：「慶應義塾の原点」（4月2日）

同教授、日本体育学会シンポジウムで発表：「慶應義塾における体育観・スポーツ観の展開ー福沢諭吉から小泉信三へー」（9月12日）

### ■ 萬來舎に書架を設置

本年4月、服部悦子様からのご寄付により、南校舎にある「社中交歓 萬來舎」の入口ロビー両脇に5連ずつの書架が設置された。これによりセンターは2013年に服部家から寄贈された約5,600点の資料の中から図書を中心に選定・配架作業を進め、10月8日、服部悦子様と関係者をお招きして書架のお披露目を行った。

### ■ 展覧会への協力

下記の企画展に資料を貸し出した。

10月12日～12月1日 中津 福沢記念館

1万円札肖像35周年記念事業

「福沢諭吉とスポーツ～勉めて身体を運動すべし～」

## 福沢研究センター諸記録(2019年4月～2019年9月)

### ■ 諸会議

- \*2019年度執行委員会(4月2日、4月26日、6月21日)
- \*2019年度第1回福沢研究センター会議(6月13日)
- \*2019年度第1回運営委員会(7月11日)
- \*『近代日本研究』第36巻編集委員会(8月29日、9月27日)

### ■ 人事

- <客員所員> 新任 松岡李奈 4月1日～
- <訪問教授> 南宗局(梨花女子大学教授) 8月1日～31日
- <准訪問研究員> 郭今先(高麗大学大学院博士課程) 9月1日～2020年8月31日
- <事務局> 新任 鈴木彩子(事務嘱託) 4月1日～9月30日

### ■ 主な来往

- 聞き取り調査には(聞)を付す。
- \*岩橋千恵氏、橋川資料閲覧のため来訪(4月11日、6月7日)
  - \*塾員荒俣宏氏、資料調査のため来訪(4月18日、6月21日)
  - \*梅田耕三郎氏、資料寄贈のため来訪(4月18日)
  - \*曾根幹子氏来訪(4月22日)
  - \*塾生新聞対応(5月7日)
  - \*墨田区郷土資料館から資料返却(5月10日)
  - \*三田体育会奈藏稔久氏来訪(5月20日)
  - \*緒方容造氏、資料寄贈のため来訪(5月23日、7月25日)
  - \*旧邸保存会吉田基晴氏、吉川和彦氏、福沢記念館ひなまつり特別展示の資料返却のため来訪(5月30日)
  - \*児島正雄氏来訪(6月17日)
  - \*濱田庸子氏、石井隆資料寄贈のため来訪(6月17日、8月2日)
  - \*読売新聞古沢由紀子氏、取材のため来訪(6月19日)
  - \*今村信和氏来訪(聞)(6月20日、7月9日、8月5日)
  - \*港区平和展対応(6月28日、7月19日)
  - \*塾員松永英二郎氏、資料寄贈のため来訪(7月8日)
  - \*中津市長、教育長、来塾(7月9日)
  - \*NHK白川巧氏取材対応(7月12日)
  - \*梨花女子大教授鄭惠仲氏、資料閲覧のため来訪(7月16日)
  - \*岩松研吉郎名誉教授来訪(聞)(7月18日)
  - \*延世大学教授王賢鐘氏来訪(7月23日)
  - \*客員所員ゲン ティ ハイソ トウック氏来訪(7月30日)
  - \*東京経済大学史料室田辺可奈氏、檜皮瑞樹氏来訪(7月31日)
  - \*塾員新井喜博氏来訪(8月1日)
  - \*NHK長谷川明氏、取材のため来訪(8月5日)
  - \*毎日新聞須藤唯哉氏取材対応(8月7日)
  - \*港区平和展への貸出資料の返却(8月21日)
  - \*豊川市桜ヶ丘ミュージアムへ資料貸出(8月23日、9月17日)
  - \*鳥居茜(あかね)氏来訪(8月26日)
  - \*立教大学准教授岡淳也氏、資料閲覧のため来訪(8月27日、9月3日、9月17日)
  - \*NHK小林育大氏、取材のため来訪(9月2日)
  - \*杉永子氏、尊父井上昌彦氏(昭21経)旧蔵資料寄贈のため来訪(9月4日)
  - \*NHK安部康之氏、武田壮平氏来訪(9月13日)
  - \*NHK柳井愛美氏、取材のため来訪(9月17日)
  - \*塾員井沢良三氏、尊父喜代麿氏(大13法)旧蔵資料寄贈のため来訪(9月18日)

### ■ 出張・見学

- 聞き取り調査には(聞)を付す。
- \*都倉、石河家資料移送のため水戸市立博物館を訪問(4月9日)
  - \*都倉、中野二誠会関係者を訪問(聞)(4月20日)
  - \*井奥、旧邸保存会理事会出席(4月24日)
  - \*都倉、横山、上原家で調査(5月14～16日、7月15～16日)
  - \*都倉、松岡、渡辺家資料調査のため三重県津市(6月8～9日)
  - \*西沢、都倉、酒井ほか、港区郷土歴史館見学(6月11日)
  - \*都倉、小泉妙氏訪問(6月18日、7月5日)
  - \*都倉、万里村れい(藤田和子)氏訪問(聞)(6月25日)
  - \*都倉ほか、NHK取材対応のため上原家訪問(6月26日、8月6日、

8月27～28日)

- \*井奥、西沢、新中津市学校運営委員会出席(6月26日)
- \*都倉、河石達雄氏訪問(聞)(7月3日)
- \*都倉、児島正雄氏訪問(聞)(7月4日)
- \*都倉ほか、鈴木家訪問(7月15日、9月6日)
- \*都倉、宮川家訪問(7月17日)

### ■ 講師派遣

- \*西沢、信濃町地区新入職員オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- \*都倉、信濃町研修医・専修医の新任者オリエンテーションで講義:「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- \*都倉、SDM 合宿で講義:「表象としての福沢諭吉・慶應義塾」(4月6日)
- \*西沢、中等部で特別授業:「一身独立と自主自由」(4月10日)
- \*都倉、船橋三田会で講義:「小泉信三から見た福沢諭吉」(4月14日)
- \*都倉、第120回日本医史学会学術大会シンポジウム(愛知県産業労働センター)で発表:「北里柴三郎を北里柴三郎たらしめているもの 研究、人材、そして「私立」」(5月18日)
- \*都倉、交詢社交詢講座で講義:「福沢諭吉『皇室論』と小泉信三」(5月21日)
- \*都倉、小田原三田会で講演:「皇室と小泉信三」(5月25日)
- \*都倉、円覚寺夏期講座で講義:「釈宗演と福沢諭吉の見ていたもの」(6月2日)
- \*都倉、東慶寺釈宗演記念講演会で講演:「俗僧にして高僧一釈宗演が開いた世界」(6月2日)
- \*西沢、すみだ女性センターすずかけ大学市民講座で講義:「一身独立一現代に聞く福沢諭吉の男女交際論」(6月5日)
- \*都倉、SFC 慶應義塾入門で講義:「戦時の慶應義塾と塾生をめぐって一慶應義塾を通して戦争を考える一」(6月7日)
- \*都倉、三田書道会で講演:「釈宗演という人」(6月15日)
- \*都倉、城北三田会で講演:「福沢諭吉と「慶應ボーイ」一慶應義塾のイメージと福沢思想の関連をめぐって一」(6月15日)
- \*西沢、通信教育部千葉慶友会で講演:「福沢諭吉の社会構想 その源流について」(中津藩の明治維新と福沢諭吉)(6月15日)
- \*都倉、日本医史学会例会発表:「長谷川泰と伝染病研究所移転問題一後藤新平宛書簡を中心に一」(6月22日)
- \*都倉、SFC 中等部1年で講義:「福沢諭吉と「塾風」(慶應らしさ)」(6月27日)
- \*都倉、三田書道会「諸道塾」で講演:「福沢諭吉と小泉信三一『皇室論』と象徴天皇制一」(7月6日)
- \*都倉、佐倉三田会で講演:「小泉信三と福沢諭吉一象徴天皇制の確立と『皇室論』」(7月6日)
- \*都倉、致知若獅子の会で講演:「釈宗演と福沢諭吉一2人が見つめ求めたもの」(7月20日)
- \*西沢、新中津市学校オープニングで講演:「中津市学校の果たした役割一新中津市学校発足によせて」(8月3日)
- \*都倉、慶應大阪シティキャンパスで発表「陸軍中野学校第一期生調査」(8月4日)
- \*西沢、中津市アーカイブズ講座で講義:「中津市学校 その概要と意義」(8月8日)
- \*都倉、長野三田会で講演:「象徴天皇制と小泉信三」(8月30日)
- \*都倉、慶應義塾高校学年講演会で講演:「慶應義塾と戦争一慶應義塾の窓から、戦争と平和について考える一」(9月5日)
- \*都倉、日本体育学会大会組織委員会・体育史専門領域合同シンポジウムで発表:「戦時下における慶應義塾の学生スポーツの実態とスポーツ観一「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト収集資料を例に一」(9月12日)
- \*西沢、経営管理研究科特別講義「福沢諭吉に学ぶ」:「人間交際と社会形成」(9月14日)

## 慶應義塾福沢研究センター通信 第31号

Newsletter of  
Fukuzawa Memorial Center for  
Modern Japanese Studies,  
Keio University

発行日 2019年10月31日 (年2回刊)

編集  
発行 慶應義塾福沢研究センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印刷 (有)梅沢印刷所